# 2024年度　サポートシステムあゆみ　事業報告

〔　生活介護・居宅介護・行動援護・同行援護・地域生活支援事業　〕

施設長　松山徹

サポートシステムあゆみは、昨年に新しく『がじゅまる班』が加わり２年が経過した。人に慣れる、場所に慣れるからスタートをし、今は利用者・スタッフのコミュニケーションはもちろん、メンバー同士のコミュニケーションもよく取れている。

2024年度の出勤率は2023年度と比べて増加した。出勤しにくい利用者に対しては電話で様子を聞いたりして疎遠にならないように働きかけた。

年末に4名の利用者がインフルエンザに感染し、5日間の自宅待機となった。色々な事が緩和されてきた中で、消毒や検温等、感染症予防も気を抜くことなく行なった。

3月にメンバーが支援中に怪我をすることがあった。病院へすぐに受診し、その後の通院もこちらで行い、傷が残ることも無かった。結果的には無事であったが、改めて「～だろう」ではなく、「～かもしれない」の気持ちで仕事をすることの必要性を感じた。

【生活介護事業】

・新規利用者　２名（奈良東養護学校卒業生１名、南山城支援学校卒業生１名）

・退所利用者　１名

（ふきのとう班）

昨年11月に利用者１名が家庭の事情で他施設に入所した。逆に、今年１月にオープンスペース‘AYUMI’から１名移動してきた。2024年度のふきのとう班所属の利用者は１２名である。

利用者の年齢層が年々上がってきており、健康管理・健康維持が引き続き課題である。

曜日によってプログラムを工夫してきた。活動の中に利用者の身体機能維持や、体を動かし、体幹を鍛えるプログラムも取り入れてきた。例えば、トランポリンで体幹を鍛えたり、室内ウォーキングで脚力の維持、ロデオマシンやステッパー等を使用したりと工夫をしてきた。気候の良い時期は外へ散歩に出かけたり、日差しが強い時は帽子を被って短時間のウォーキング等、その都度天気や気候に気を遣いながら活動をしてきた。

昨年度からスタートをしたドッグセラピーも継続してきた。以前は見るだけで怖がっていたが、回数を重ねるうちに、犬を撫でられるまでに距離が縮まった利用者もいた。参加した利用者の顔に笑みが見られたり、全体にリラックスした状態で緩やかな空気が流れていた。引き続きドッグセラピーを継続していき、利用者の心の安定と、新しい発見をしていく。

（がじゅまる班）

がじゅまる班として、初めて一年を通して活動を行った。活動では、以前から続けている内職を行ってきた。先方から毎回多めの材料を預かっており、利用者は安定した仕事の量をこなせている。内職は午前中に行っている。午後からは身体機能低下防止の為に室内運動や散歩、リラッ

クスを目的としたミュージックやドッグセラピー等を行った。

昨年度は新規利用者を２名迎えた。利用者は比較的静かな環境での作業を行えたので、仕事の効率も良かった。金具の締め付けや、ねじ回しの内職、紙ちぎりやチラシ取りを行った。昔から行っている作業ということで、利用者も落ち着いてできていた。活動では、ボッチャや卓球バレー、リラクゼーション等で気分転換ができるように工夫をすることができた。

余暇活動では、いちご狩り、平城京跡に凧揚げ、施設でカレー作りやバーベキューを行なったり、皆で楽しむことができた。

【居宅介護・行動援護・同行援護】

居宅介護は、スタッフが一名増えたことにより、ニーズに応えられる件数が増えた。それに伴い昨年度の利用件数、並びに利用時間数は増加した。

行動援護は、近郊へ公共交通機関を使っての移動や、プール、銭湯、水族館等利用者のニーズに合ったサービス提供を行った。その結果、昨年度に比べて利用回数や利用時間を上回ることができた。

出来る限り利用者のニーズに応える事によって、本人やご家族の方との信頼関係をより強固に出来たらと思う。ただ、収入に対して支出の方が多く、収支バランスに問題があったので、今後多角的な検討が必要である。

同行援護は２名の利用者が継続して利用されている。

【地域生活支援事業（移動支援】

移動支援は利用時間数や回数も昨年度に比べて大幅に増加した。ウォーキングやお出かけ、買い物等のニーズも増加傾向であった。

以上